

第4章 道のり

「のぼる、のぼる、起きなさい。」

のぼるは、大きく自分の身体がゆさぶられているのを感じた。

「う〜ん、もう朝、ミシャ？」

「何を言っているの、この子は？」

少し怒ったお母さんの声が聞こえてきた。

おそろおそろ、のぼるは目を開けてみた。

お母さんが、少し心配そうな、でも少し怒った顔をしていた。

「今は、夜の7時よ。お母さん、帰ってきたら、のぼるが寝ていたのよ。どうせゲームでもいっぱいやって、つかれて、寝てしまったんでしょ。」

まあ、ゲームでつかれた、というのはあっているけれど、お母さんが思っているゲームとはちがったんだけどな。

のぼるは、こころの中で、そうつぶやいた。声にだして言うと、お母さんがまた心配する。

「そうね、今は、まだお母さんには内緒のほうがいいかもしれないわね。」ミシャの声がした。

のぼるは、大きくあくびをして、ベッドから起き上がった。まだ、眠い。

「のぼるー。早く起きてきなさい。」

お母さんの声が台所からする。

「もうすぐ、ごはんよ。」

そういえば、お母さん、今日は仕事が早く終わったのかな。いつもは、帰りはもっと遅くて、ときどき、一人で夕ご飯を食べることもある。

少しうれしくなって、のぼるは階段を下りていった。

台所から、おいしそうなカレーのにおいがする。

カレーが大好きなのぼるは、気分がどんどん上がっていくのがわかった。

「やった〜〜〜！カレーだ！」

お母さんがこっちを見て、すこしうれしそうにしている。

「早く、手を洗ってきなさい。」

素早く洗面台で手を洗ってきたのぼるは、すぐに食卓についた。

「こういうときは、すぐに行動できるのね。」

お母さんが、ちくっと、イヤミを言った。

確かに、言われてすぐに行動することが少ない。人に言われると、なんとなく、やりたくなくなってしまうのだ。

でも、まあ、いいか。カレーだもんな。

お母さんのイヤミも、カレーの前では、のぼるは無視することができた。

「いっただっきま〜す！」

のぼるは、すぐにカレーをほおばった。

「おいし〜い！」

「のぼるは、おいしいものには、正直なのね。」

お母さんがうれしそうな顔をしている。

カレーは大好き。カレーはおいしい。なにより、お母さんが作ってくれたカレーがおいしい。そして、お母さんと一緒に食べるカレーだから、おいしいんだ。

「そうね。だれかと一緒に食べるって、しあわせなことね。」

ミシャもうれしそうに、のぼるを見ていた。

「今日は、たくさんがんばったから、ごほうびだね。」

うん。でも、お母さんはぼくが今日何をしたかは、知らないけれどね。

「それでもいいのよ。自分のがんばったことを、自分で認めてあげること、こんなふうに、自分へのごほうびだと考えることも、大切なのよ。だって、そうしたら、ちょっとだけ、自分のこと好きにならないかな？」

う〜ん、自分のことを好きになる？ どういうこと？

「いいところも、苦手なところも、悪いところも、ぜんぶひっくるめて、自分っていいな、自分って大切だな、って思う気持ちよ。」

え〜。そんなこと全然思えないよ。

「そうね。そんな風に思えるように、これからも一緒に旅を続けてみましょうね。」

旅？ これからも？

どこにも行ってないよ。

あ、でも、行ってはいないけれど、ドラゴンは目の前にいたけどね！

ミシャがおもしろそうに笑った。



「わたしが言っているのは、こころの旅のことよ。自分のこころを変えていくのは、よく、旅に例えられるの。そこには、コンクリートのように舗装されていて、歩きやすい道、自転車であがるのもむずかしいような上り坂、すこしこわいぐらいの下り坂、少しずつ休憩が必要になるような山道、でも自然がたくさんあって、そこにいと気持ちがいい山道、地面がつるつる凍っている

るかもしれない氷河の道、逆にぐらぐら暑くて、自分もゆであがっちゃいそうなマグマがある道、本当にいろんな道があるの。もちろん、イメージの中での話だけれど。そんな道を通して、なにがあるのか、それは、通った人にしかわからないのよ。」

よくわかんないや。

「たとえば、今日は、のぼるくんは2つの大きな道を通ったわね。一つは、担任の先生に、ごまかさなくて、忘れ物をした、と言えたこと。二つ目は、ドラゴンと向き合って、戦おうとして、自分の恐怖心についてわかったこと。」

うん。その2つは、今日の「あったこと」だね。

「では、たとえば、一つ目の道、先生に忘れ物をしたことを言ったこと、そのときのことを少し思い出してみて。」

いつもは、他のクラスの子から取ってきちゃうんだけど、ミシャに言われて、はじめて正直に先生に言ったんだっけ。すごくすごく緊張して、心臓がとびだしそうだったけれど、言ってみたら、先生は怒らなくて、ほっとした。

「そうだったね。じゃ、この経験を道にたとえるとすると、どんな道だったと思う？」

そうだな～。

のぼるはそのときの感覚を目を閉じて、思い出してみた。すごく体が緊張したな。ガチガチだったし、心臓はドキドキだったけど、でも、やらなきゃ、と思って、おそるおそるって、感じだったしな。

がけっぷちを、そろそろと、こわごわ通っている感じかな。

「そうそう。こころが変化するとき、変化しようと準備しているとき、それはいろんな道を通っているの。そんな道をたくさん通るから、旅なのよ。」

なんとなく、わかったような、まだよくわかんないような・・・。

「あくまで、イメージの中で、なのよ。でも、どんな道でも、わたしと一緒に通ってみましょうね。そうしたら、一つひとつの道を通るたびに、のぼるくんは、より強く、よりしなやかに、成長していくわ。

そして、これは、旅なのだから、楽しみましょうね。」

う～ん、わかった・・・

まあ、一人で通らなくていいのだから、いいか。旅はたしかに楽しそうだし。

「今日は、のぼる、しずかね。」

お母さんの声がして、はっと、のぼるは、顔を上げた。今まで、(頭の中だけど) ミシャと話していたから、お母さんのことを、忘れていた。しかも、ミシャが少しややこしい話をしていたので、そちらに気を取られてしまったのだ。

「そんなことないよ。」

のぼるは、あわてて言った。

「食べ終わったら、食器は台所に持って行ってね。」

「うん、わかった。」

「やっぱり、今日、のぼる、少し変よ。」

「なんで？」

「いつもだったら、うるさいな、って言って終わるのに。」

「そうだっけ？」

「でも、わかった、って言ってくれて、少しうれしいけど。」

お母さんは、あまり自分の気持ちを言葉にしないが、今、そんな言葉を聞いて、のぼるもうれしくなった。

その日、のぼるはとてもいい気持ちで、ねむりについた。なんだか、いろいろあったけれど、うれしい気持ちがいっぱいだった。なにかをやりとげた、そんな感じがしていた。その達成感は、のぼるには、はじめての感情だった。

お母さんが言ったとおりに、のぼるは、食器を台所に持って行った。

ミシャが提案してくれて、自分で思いついたとおり、明日の授業の準備は、夜のあいだにやった。予定帳は書いていなかったから、思い出せないところもあった気がするけれど、でも、夜のあいだに準備していると、あせらなくてよかったから、のんびりとした気持ちで用意ができた。もちろん、お母さんの大声も聞こえてこない。お母さんは、のぼるの様子に、首をかしげながら、のぼるのおでこに、何度も手をのせて、熱がないか確認していた。そんなお母さんの様子に、のぼるはおかしくなってしまうて、わらってしまった。お母さんも、一緒になって、わらった。一緒にわらうと、うれしい気持ちが2倍、3倍と大きくなっていった。

次の日、朝起きたのぼるは、いつもとちがって、気分が爽快だった。なんだか、すべてがうまいくような感じがした。こんなに、目がさめて、さわやかな気持ちになったことはなかった。

おはよう、ミシャ。

・・・

あれ？声がしない。ミシャ？

・・・

それでも声がしない。のぼるは、まわりを見渡したが、ミシャのすがたがない。

すこし不安になってきたのぼるは、ミシャの名前をよびながら、階段を下りて行った。

リビングにはいると、お母さんがしかめっ面で、朝食の準備をしている。その横で、お父さんが、怒り顔で、新聞を読んでいた。

のぼるの家は、リビングとダイニングが一緒になっているので、準備のいそがしい朝は、お父さんもお母さんも、一緒にいることが多い。そして、一緒にいる、ということは、ケンカをすることも多い、ということだ。

またか・・・

のぼるは、そうこころの中で思いながら、ミシャのすがたを探した。

いなくならない、って言ってたのに。どこに行ったのだろう？

ミシャはリビングにもいない。

トイレかな？そんなわけないか。

お風呂かな？それもないか。

のぼるは、一人でぶつぶつ思いながら、家中を探した。

「のぼる、何しているの？早く、たべちゃいなさい。」

朝の支度にとりかからないのぼるを見て、お母さんがまた怒っている。

せっかく、いい気持ちで起きたのに・・・

いつもの朝のように、だんだんイライラしてきたのぼるは、すこし乱暴にイスをひいて、食卓についた。トーストとハムエッグを、口の中にたくさんほおばり、牛乳で、ながそうとした。でもたくさんほおばりすぎて、のぼるは、むせてしまった。

「もう、朝から仕事をふやすんだから。」

お母さんは、のぼるの片付けをしながら、またイヤミを言っていた。でも、のぼるはミシャが

どこへ行ったのか気になってしょうがなかった。早く食べ終わって、ミシャを探しに行きたかった。もしかしたら、さきに学校に行ってしまったのかもしれない。

どんどん、たくさん、口に入れていって、さっさと食べ終えたのぼるは、すぐにテーブルから離れた。

「待ちなさい、のぼる！食べ終わったら、食器は台所でしょ？」

「もう、うるさいな。」

「昨日のあれは、なんだったのかしら。」

また、イヤミだ。昨日、すんなりお母さんのいうこと聞いたから、今日、ぼくはこうやってイヤミを言われるんだ。手伝いなんて、はじめからしなきゃよかった。

そう思った瞬間、

「お母さんがイヤミを言うのは、昨日、お手伝いをしたかどうかに関係するかしら？」

ミシャの声がした。

「ミシャ！」

声のした方を振り向くと、ミシャが、お父さんの横に立って、ほほえんでいる。

「どこに行ってたんだよ？」

「のぼる？だれに向かって話しかけているの？昨日も、ミシャ、って言ってたわよね？」

お母さんが、のぼるの方をけげんそうに見ている。

しまった！また声に出してしまったんだ。のぼるは、あせりながら、言い訳を考えた。

「あ、ちがうんだ。今、学校で劇の練習をしているんだ。それを、今、やってみたんだ。どうだった？」

お母さんは、信じられない、という顔で、のぼるを見ている。

「本当だよ。じゃ、学校行かなきゃいけないから。」

のぼるは、あわてて、自分の部屋にかけ上がり、ランドセルを手にして、家を飛び出していった。

「あ、のぼる、気をつけるのよ！」

お母さんの声が、後ろでひびいていた。

はあ、あぶなかった。でも、お母さん、かなり変な顔してたな。うまいウソを考えなきゃ。

それにしても、ミシャ、どうしてとつぜんいなくなって、また、とつぜん、でてきたんだろう？

ふと横を見たら、ミシャがのぼるの横にいた。

ミシャは、いつも落ちついているように見える。

「おどろかして、ごめんなさい。」

ミシャがすぐにあやまってくれて、のぼるは、イライラがずっと消えるのを感じた。ミシャは
はげますことも、あやまることも上手だ。

どうして、今朝、いなかったの？

「のぼるくん、今朝起きたとき、とてもいい表情をしていたからよ。」

いい表情？

「そう、なんだか今日もいい日になりそう、って顔に書いてあるような表情。」

そういえば、お父さんとお母さんの怒り顔見ていたら、忘れてしまっていたけれど、起きたとき
きは、とてもいい気持ちだったんだっけ。

「すがすがしい気持ちだったのね。」

でも、それと、ミシャがいなくなったのと、どう関係があるの？

「わたしは、のぼるくんが、のぼり坂やでこぼこ道、険しい山道などを歩いているときに、一緒に
歩いて、うまく通れるように助けるのが、わたしの役割なの。だから、のぼるくんがきれいな
道を歩いている今朝はいなかったの。でも、声がしなかったり、すがたは見えないかもしれない
けれど、わたしはいつも、のぼるくんと一緒にいるのよ。」

すがたが見えないんじゃない、そばにいるのとはちがうんじゃない？

「ううん、わたしはいつも、のぼるくんの中にいるの。」

う～ん、またわけがわからないや。

「このことは、のぼるくんの中で、自然にわかるときが来るから、大丈夫。

さあ、学校に急ぎましょう。」

そうだった！学校のベルがもうすぐなっちゃう。

のぼるは、学校へかけて行った。